

演出も、本物志向が欠かせない。

特色あるまちづくりの好例として取り上げられ、視察や観光客が絶えない滋賀県長浜市の黒壁。岩手県内でも、黒壁の取り組みを参考にしたまちづくりを進めている市町村もあるほど、一時は全国の自治体や商店街関係者の注目を集めた。その黒壁も、近年はガラス細工製品の売上などが伸び悩んでおり、9月から万華鏡をテーマにしたイベントなどを展開するという…。低迷の打開に向けた各地の取り組みとユニークなアイデアを追ってみた。



道具よりも工夫で勝負する！

黒壁は、古くから街に残る土蔵を活用するとともに、蔵を基調とした街並みづくりを進めてきた。しかし、そのテーマは地域に密着したもののばかりではなく、ヨーロッパに古くから伝わるガラス工芸を核に、周りを取り囲むように地元商店の品々が配置されている。もちろん、そうした活動の中から新しい特産品や名物も生まれるわけだが、ガラス工芸そのものは蔵を活かした街並みづくりの演出であって、人をひきつける目玉商品である。今回新たに展開するイベントのテーマとなった万華鏡も、実はガラスをモチーフに考え出されたもの。天井を回る万華鏡を真下から見上げられる大きなオブジェを設置するほか、各店舗の看板に万華鏡を取り付け、店先で回転する街並みをのぞけるようにするという。変化の時代だからと闇雲に真新しさを追うのではなく、メインテーマから外れることなく、しかも“古くからあるツール”を活かしながら新鮮に感じられる仕掛けを工夫すること。それこそが再生への第一歩なのかもしれない。

中身にこだわり販路を拡げる！

“古いもの”を演出に活用した事例をもうひとつ。石川県金沢市にある和菓子の老舗・森八では、歴史的街並みで知られる「ひがし茶屋街」

に、江戸時代の趣を再現した菓子店を開店した。森八は、1625年創業の和菓子屋で、藩政時代には加賀藩御用達を務めたほどの由緒ある家柄。その当時の格式を活かし、江戸時代の情緒を味わいながら金沢と和菓子の歴史を体験してもらおうと企画したものだという。新しい店舗は、今から約180年前に建てられた民家をそのまま活用したもので、客は高さ1メートルのくぐり戸から中に入る仕組みになっている。扱う商品は、羊羹や干菓子など森八が当時作っていた菓子ばかりで、包装も備前和紙を使うという徹底ぶり。とかくかけ声や外見だけが先行し、中身が伴わない同類の事例が少なくない中で、細部までこだわった本物志向の、老舗ならではの取り組みといえる。

原点を見つめてビジネスを興す！

売るものは“古い”わけではないが、いわば“古い価値観”にこだわった挑戦を紹介しよう。愛知県名古屋市商業施設マナハウスでは、8月中旬から作家とタイアップした新しいカテゴリーの書店をオープンする。テーマは「売れない本屋」。良書が売れにくくなったといわれる現状にあって、活字文化の衰退を懸念した作家の宗田理さんが呼びかけたもので、

宗田さんが選んだ良書を200冊ほど並べ、読書会などを開催するほか、ホームページを開設するなどして出版社からの売り込みも受け付けるといふ。活字離れが叫ばれて久しい現代。劇画やタレント本などエンターテインメントの強い一部の本がもてはやされる時代にあって、出版文化の原点に戻ったビジネスの試みは、新鮮な感動を呼び覚ますかもしれない。

古典を聴きながら効率を高める！

最後に、職場の作業効率を高めよう。古典”を活用した事例をひとつ。先月、鳥取県米子市にある東京印刷などが中心となって日本音楽熟成協会が結成された。音楽熟成とは、職場にクラシック音楽を流すことで作業ミスなどを減らし、生産効率を高めようという試み。植物の成長やお酒の熟成などに音楽が有効なことは、読者も耳にしたことがあるのでは。実際、中心企業のひとつである東京印刷では、製本ミスなどによる損失が70%近く減ったとか。製品の仕上がりが良くなっているそうで、今後は「音楽熟成」を商標登録するとともに、会員企業を増やし、普及に努める予定だという。かけ声や雰囲気より先効果と実績。新しい世紀とはいえ、歴史と伝統に学ぶことも忘れてはいけない。(公)